

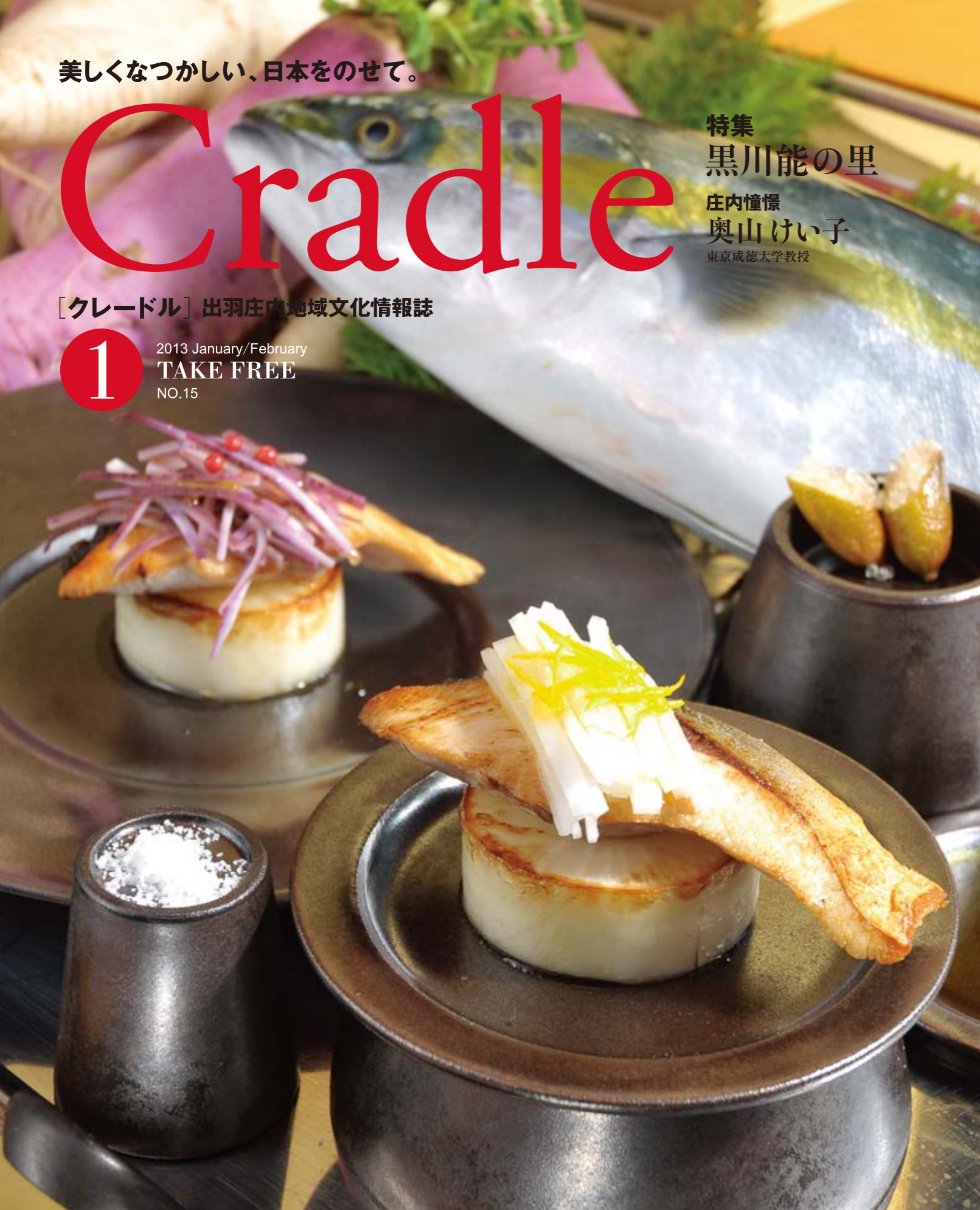
美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
黒川能の里
庄内憧憬
奥山けい子
東京成徳大学教授

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

1 2013 January/February
TAKE FREE
NO.15



Cradle 1 美しくつかしい、日本をのせて。
【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

2013 January/February
平成25年1月1日発行(隔月奇数月発行) 第2巻9号(通巻15号)

発行/Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域子サイン] 電話0235 (64) 0888
制作/Cradle編集部 山形県酒田市京田2-58-3 [コソツ・コーポレーション] 電話0234 (41) 0012

FIDEA GROUP



鶴岡市/月山

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします
本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます

 庄内銀行

安心して祖父に抱かれるこちよさの中で、
能は昔話として語り継がれ、
黒川のゆりかごとなって幼い者を育んできた。

人の心の よりどころとしての能。

奥山けい子

初めて鶴岡に降り立った日。豪雪の中でバスの発車を待つ間に、ひとりの高校生と出会った。彼は家族に能役者がいると言い、道を案内してくださった。お宅に伴われ、こたつで暖をとり、母上から山菜の料理をいただき、まどろむ。私が黒川の扉を大きく開けた瞬間だった。

王祇祭の日、当屋の演目は大地踏で始まる。小さな子の柔らかなくよく通る声とまっすぐな動きを、観客も真剣に見守り、舞台は神々しい空間となる。やがて式三番と能が演じられ、独自の体系を持つ演技に私は引き込まれていった。

数十年がたち、昨年十一月、春日神社の新嘗祭に恒例の演能を訪ねた。秋に入ってから雨が続き、雪囲いができない、と人々は嘆きながら、夜の宴で今日の能のできばえについて熱心に話しこむ。能へのこのいつくしみは、どのように培われてきたのだろうか。

手元に、佐藤玄祐氏の『櫛引昔あつけど』という、黒川を含む鶴岡市櫛引地域の昔語りを収めた一冊がある。そこに採録された昔話を読んで、なるほどと思った。黒川の昔話は、能に取材したものも多い。

「鉢木」は、大雪の日に旅人を泊め、鉢の木を切って焚き、温めてもてなした武士が後にほうびをもらう話である。渡部甚之助氏は述べる。「大雪の年は『今年ますます大雪になると悪いから鉢の木やめろう』とか『今年は雪少ねよださげ やろで』と言ってきたものだ」。雪は豊作のしるしだが、厄介でもある。雪から逃れられぬ暮らしの中で、能「鉢木」は切実な演目となり、祈りを込めて演じられてきた。

「紅葉狩」は『林間に酒あたためて』飲もうというわけの」と、蛸井弘太氏が謡の詞章をまじえて語る。聞き手はいつとはなしに謡に親しんでいく。そして「なんでも油断することは一番あぶねもんだ」と、昔話らしく締めくくられ、落ち着く。

「絵馬」では鍛持実氏が「こげだ話は、能ならえ（練習）終ってから教えてもらった。もつと小さい時は、じいさん抱がれて床の中で聞いたり、ふろの中で聞いたりもしたもんだけ」と言う。安心して祖父に抱かれるこちよさの中で、能は昔話として語り継がれ、黒川のゆりかごとなって幼い者を育んできた。長じて後、能が心のよりどころとなる。能は舞台の外に、精神世界に深く根を張っている。

役者も家族も友人も、皆が能を理解し、共感し、こまやかに愛情を注いでいることが、しみじみと観客に伝わってくる。それこそが黒川能の魅力ではないか。折りおり舞台に触れるたび、思う。



平成20年(2008)王祇祭、
下座「高砂」(春日神社にて)

おくやま・けいこ 1950年、東京生まれ。お茶の水女子大学大学院修了。国立能楽堂を経て、現在は東京成徳大学人文学部日本伝統文化学教授。発表論文に「近代における能の離子方」(東京成徳大学研究紀要14号、2007)、「能と歌舞伎の女性表現」(歴史評論708号、2009年)などがある。

特集

黒川能の里

鶴岡市黒川に室町時代から伝わる国指定重要無形民俗文化財の黒川能は、一年を通し、春日の神に奉納される神事能です。なかでも真冬の2月1日、2日に行われる王祇祭には、黒川の人々の信仰の姿や黒川能のすべてが集約されているといっても過言ではありません。祭りに向けて人々の心はやはりはじめた初冬、黒川を訪ねました。

【取材協力】
春日神社、王祇会館、黒川能保存会

【参考文献】
桜井佳乃著『王祇祭を見る』平成22年発行
『太陽 2月号』株式会社平凡社・昭和41年発行
／真壁仁著『黒川能＝農民の生活と芸術』日本放送出版協会・昭和46年発行
／『朝日ソノラマ 4月号』朝日ソノラマ・昭和47年発行（以上3冊、齋藤和久さんより）

【トピラ写真】
上座「大地踏」（2012年王祇祭 春日神社）





1月31日、当屋使い(★)



1月17日、十七夜(宮上り)(★)



1月中～下旬、豆腐焼き(★)



1月上旬、世帯持振舞(★)



王祇祭のために1年かけて準備する食材(★)



2月1日早朝、王祇降し(★)



1月下旬、三番汁づくり(★)



1月上～中旬、不浄祓(★)



12月、網打(★)

★印写真/提供 齋藤権太郎家(平成14年上座当屋)、撮影 写真屋写楽

今年、黒川で生き抜いてきた父への賞

祭に向けた準備を進めます。

「同じ滝の上集落で平成19年に当屋をし

春日神社からの旧道を境に、12の集落

庄内平野の南側、月山麓に位置する鶴

その里の人々は年に二度、「王祇祭」で

古くからの当屋制度を今も大切に守り続けています。

食材準備、豆腐焼き… 当屋は一年かけて 神宿の支度をします。

と話し、椿出の秋山嵩義さんは、前年の

賛と労わりの気持ちが伝わります。

平親善兵衛家
Heishin Zenbei
平成25年王祇祭
下座当屋

上野久治郎家
Ueno Kyujiro
平成25年王祇祭
上座当屋

をお迎えする神宿、すなわち「当屋」が

上座と下座から一軒ずつ選ばれるわけ

ですが、その家では例年、家族総出で王祇



下座



上座



2月3日、道具渡し(★)



2月2日夕方、棚上り尋常(★)



2月2日、朝尋常(★)



2月1日午前、座狩り(★)



2月1日夕方、舞台づくり(★)



2月3日、できあがり(★)



2月2日王祇祭終了後、一斗餅を当屋へ(★)



2月2日、巡りの大人衆



2月1日夜半、暁の使い(★)

★印写真/提供 齋藤権太郎家(平成14年上座当屋)、撮影 写真屋写楽

上座の世帯持頭。今までに4回この役を務めました。同じく前年に下座の頭を務めた小在家の秋山清一さんは7回目。お二人とも当屋仕事の大ベテランです。

1月17日、「十七夜祭」。別名「宮上り」ともいわれ、春日神社の宮司から当屋頭人へ「出羽守」「尾張守」などの国司の称号が与えられます。頭人は以後、その名称で呼ばれるようになります。

数日後、当屋が新しく建てた煎じ場で「豆腐焼き」が開かれます。子どもからお年寄りまで集落中の人々が小屋に集まって、二日かけて串に刺した数千本の豆腐を囲炉裏で焼きます。後日、焼いた豆腐は冷気にあてて凍らせ、さらに王祇祭が近づくと「二番汁」を作ります。

王祇祭を3日後に控えた29日、春日神社下の榊屋敷の庭に、幣と注連が張られ、春日の神が降ろされます。30日には当屋頭人や役者衆が春日神社に集まって、王祇祭が円滑に進むことを祈る「酒くらべ」。31日は当屋の使いが氏子の家をまわって祭りの開催を告げます。

2月1日、ついに王祇祭です。夜中、当屋の家では神様を迎えにあげる人たちの身が清められます。朝3時、春日神社に人々が集合。神職によって春日の神が上座下座の2本の「王祇様」にうつされ、迎える者に渡されます。そして夜明け頃王祇様を担いだ行列が神社を出発し、上座と下座の当屋へ向かい、素襖姿の頭人によって神宿へ迎え入れられます。

当屋ではその後、神職による王祇様の衣つけ、各座の氏子主人が勢ぞろいする

演能が始まり、すべての演目が終わる頃には次第に夜が明けてきます。そして2日の朝、役者衆と当屋頭人たちが王祇様を担いで春日神社へ出発。残った人で後片付けをしていると、まもなく来年の当屋が床の間の神具を受け取りに来きます。次は春日神社に向かった頭人や役者衆などの昼食の準備です。

当屋を出た行列は、まず下座が榊屋敷に入って「大地踏」を行い、その後、上座が榊屋敷に「七度半の使い」をたてて下座に宮上りを催促します。そして一緒に神社に向う途中、どちらが早く王祇様を社殿の中に立てかけるかを競争する「朝尋常」が行われ、その後、社殿内で再び両座の演能が行われます。

2日目の能が終わる午後3時半頃、再び両座競い合いの神事です。王祇様を棚の上にのせる「棚上り尋常」、王祇様を棚から投げ、棚の上の一斗餅を落とす「餅切り尋常」、王祇様の布を剥いで来年の当屋の王祇守の首に巻きつける「布剥ぎ尋常」。社殿は尋常を競い合う若者の熱気と興奮に包まれます。その後、王祇様は神殿の中に収められ、祭りが終了。その晩当屋では、無事に務め終えたことを祝う宴が開かれます。また来年の受当屋の家でも、この日から3日かけて祝いの

座の集会、集落の女性や子ども、一般客への振舞などが、午前午後にかけて各座の手順で進みます。裏方では世帯持の指示のもと、集落の人たちが当屋を訪れる百数十人分の食事と飲み物を用意。

「当日になると、当屋家族はお客様になるからの。世帯持は台所の脇を控え室を準備してもらって、台所仕事を女性の世帯持とご飯炊きが、座敷のさまざまな段取りを男の世帯持が中心になって進めるなやの」と秋山嵩義さん。

振舞が終わる午後3時頃、能舞台の準備が始まり、役者衆が楽屋に入ります。夕方6時頃、演能開始。大地踏に始まり、式三番、能一番、狂言一番の演目がそれぞれ当屋で行われます。夜半、下座から上座へ「暁の使い」が訪れる頃、役者や見物人が食事をとりまします。その後また

上座

秋山嵩義さん
Akiyama Takayoshi
平成24年王祇祭
上座世帯持

椿出集落。今まで地域の行事に全く関係なく生きてきたという秋山さんは、平成16年以降、世帯持を4回経験。今年王祇祭では「巡りの大人衆」として舞台袖に並びます。



下座

秋山清一さん
Akiyama Seiichi
平成24年王祇祭
下座世帯持

小在家集落。7回におよぶ世帯持経験は分厚いファイルにしっかり保管。地域の当屋制度を支えてきました。「世帯持は食べものを扱うから、その取り扱いが一番気をつかうなやの」。



宴が開かれ、次の祭りの準備を始めます。「翌3日は当屋の家で後片付け。前日に餅切り尋常で落とされた一斗餅は小さく切って氏子に配ります。王祇守と提灯持は神社と太夫宅に分かれて挨拶まわり。若者衆が道具を次の当屋に持っていくって飲まされて戻ります。大体これが夕方4時までには終わるから、それから『できあがり』って当屋でご馳走になるわけだ。そして解散。忙しいからあつという間だけ、今回はいい当屋だつくと皆からいわれれば世帯持としてもホッとしますの」。

4日、春日の神を「戻す」「注連下ろし」が榊の庭で執り行われ、王祇祭に幕が降りると、再び黒川に新たな季節がめぐり始めます。

深い雪に覆われる王祇祭の夜、神宿である当屋では、大地踏にはじまって式三番、能五番、狂言四番が、夜を徹して王祇様に捧げられます。蠟燭の炎が揺れる舞台の前で、樽酒を飲みながら能をみつめる当屋頭人や地域の人々…。

こうした王祇祭と黒川能の伝統が、いつどのようにもたらされたかは定かではありません。しかし中世に庄内を支配していた武藤家の紋が春日神社や能装束に残ることなどから、室町時代には既にあったと考えられています。その後、領主が最上家から上杉家と移り変わる中でも黒川能は守られ、江戸時代には庄内藩主酒井家から厚い保護を受けてきました。

そのため黒川では、かつては全員が役者だったといわれるほど、能が暮らしと密接に結びついていました。田畑を耕し、自分で書き写した本で謡の練習を行う。それを裏付けるかのように、黒川にはどここの家にも江戸時代の謡の手書き本が残されています。「だからこんな田舎の村でも江戸時代、字を読めない人がほとんどいなかった」と話すのは下座太夫の上野由部さん。「昔からよく『黒川に嫁やるな』『黒川から婿とるな』と言われてきたのは、男が能の練習ばかりして嫁が野良仕事をさせられる、婿をもらおうと能の口上ばかり言って働かない、それが一番の理由だったようです」。

現在、能に携わる役者の数は、上座と下座を合わせて小学校低学年から70代までの140名ほど。黒川の人口の約1割にあたります。その中で人々は、能を演

同様に、下座の方も太夫の由部さんを中心に意欲的に若手育成に取り組んでいます。「稽古はある程度身になつてきた時に注文をつけていきます。そして初めての演目の時は、近いうちに必ず後2回ほどさせる。そうすると身につくんです」と由部さん。遊ぶ時間を削っても稽古に励む若者が黒川に多くいる理由は、こうした稽古を通して表現の喜びを実感しているからでしょう。「みんな仕事をしながら稽古をするわけだから、よくほかの地域の方々から驚かれますよ。でも我々の能は、観客にみせる能ではなく、神様にみせるものですからね」。

神事能としての黒川能。その特徴を、春日神社の欄干として各神事を執り行う遠藤重嗣さんにお聞きしました。「まず神様を楽しませる能だから、観客ではな

王祇祭の1日目に、夜を徹して2軒の神宿で演じられる黒川能は、室町時代に伝わったとされ、春日神社の氏子で構成される上座と下座の能座によって継承されてきました。

黒川能は自然とともに暮らす人々の神に対する感謝の芸能。

じる「舞方・謡方」、笛や鼓などを担当する「囃子方」、狂言を演じる「狂言方」に分かれ、稽古をしています。今年の頭人である上座の上野久治郎さんは、若い

齋藤賢一さん
Saito Kenichi
黒川能上座太夫25代目

前上座太夫は鈎持松治さん。平成14年に太夫の相伝を受け、15年から太夫職を務めています。かつては上座太夫も世襲制でしたが、現在は座の話し合いで決めることもあります。

頃に狂言方の役者をし、年をとってからは囃子方で太鼓を打っています。下座の平親善一さんは、舞方・謡方を経て師匠格にあたる「地謡」の地頭です。

練習は両座とも舞台の約一カ月前から始まります。といっても黒川では、王祇祭が終わるとすぐに蠟燭能があったりとはぼ一年中舞台があるため、練習も一年を通して行われます。上座太夫の齋藤賢一さんに、どのように若手の育成をしているか尋ねました。「上座はそれぞれの師匠格の家が離れたところさあるから、自分の家から近い師匠のところに行つて稽古をしています。太夫の私が総合演出みたいなことをする全体練習は、週一度ほど集まって。だから能座の方は教える体制が整つてるし、それぞれが形や謡をキチッと教えていけば、今後の継承も大丈夫かなと思います」。



下座

上野由部さん
Ueno Yoshibu
黒川能下座太夫20代目

室町時代から下座太夫を引き継ぐ上野與四太夫家20代目。祖父・上野丹宮、父・上野左京に続き、平成10年に下座太夫を継承。現在は鶴岡第二中学校で校長を務め、今春に退職予定です。

く神前に向かって舞います。だはげ東京の国立能楽堂でも、外国の舞台でも、演能前には必ず春日の神様を舞台さ降ろす

また王祇祭には、小さな子どもが大地を踏みしめて悪霊を封じ、地霊を呼び覚ます「大地踏」や、上座の鈎持源三郎家で代々引き継ぐ「所仏即翁」、下座の「所仏即三番叟」など、この日にしか舞わない特別な演目があります。そのめずらしさから、王祇祭に関心を寄せる研究者や能楽関係者も多くいて、黒川まで度々足を運んでいます。「そして一番の特徴は、上座と下座に分かれて能が継承されてきたことです。両座がライバル意識を燃や



1月中～下旬、大地合わせ(★)



2月2日、大地踏(2012年王祇祭)

2月1日、所仏即翁(★)



狂言「柿山伏」(2012年新嘗祭)



★印写真／提供 齋藤権太郎家 平成14年上座当座／撮影 写真屋専業



上座「難波」(2012年王祇祭/春日神社)
下座「高砂」(2012年王祇祭/春日神社)



して芸を磨きながら、助け合い、学び合うというこの仕組みがなかったら、黒川能はここまで残らなかったと思いますのう」と遠藤さん。

黒川能には、その関係を象徴するかのように、座長である能太夫を継ぐ際、下座の後継者は上座の太夫から、上座は下座の太夫から相伝を受けるといふしきたりがあります。上座太夫の齋藤賢一さんは平成14年に由部さんから「翁」の伝授を受け、翌年太夫になりました。子どもの頃から能に励んできたという齋藤さんは話します。「上座にも下座にも同じ年代さちようどいいライバルがいたから、それが刺激さなつて稽古に励んできたし、好きで役者が続けてきたからの。ただ、黒川能は王祇祭があつてのものだからの。平成に入ってから、祭りの当屋となる「家」そのものの後継が崩れてきているのが、一番の心配ごとです」。

黒川に残る「合力」という言葉は、当屋を受けた家を集落や親戚みんなで支える相互扶助のシステムです。しかし「黒川に嫁やるな」の解釈が、時代とともに当屋を支える親戚の物理的精神的負担を意味するようになった今、当屋を辞退する家が増えるなど、地域は難しい課題を抱えるようになりました。「祭りが存続できるように今までも改革してきましたが、これからも時代に合わせて少しずつ変えていかないと」と齋藤さん。

下座の太夫は、室町時代から上野與四太夫家のみで引き継がれてきた世襲制です。「それが一番の苦痛だね」と話す由



春日神社

遠藤重嗣さん Endo Jushi 春日神社 榊宜 榊屋敷

宮司の難波玉記さんと他の神職5名とともに春日神社の神事を遂行。なかでも遠藤さんは、榊屋敷=遠藤重左衛門家として、王祇祭に関わる数々の神事を執り行っています。

部さんは当家の20代目。平成10年に前上座太夫の釘持松治さんから相伝を受けました。「祖父(丹宮)は父(左京)を4歳で舞台に出すために、手足を縛って稽古をしたり、出来が悪いからと雪の中に放り投げたりと、相当厳しく稽古をしました。だからその芸はプロが認めるほどすごかったんですが、何でもそこまでして黒川能を守り続けなきゃいけないんだという葛藤を強く抱えていたわけです。私がか子どもの頃、父は酒を飲むたびに『継ぐ必要はない』と言っていましたね」。

過疎化、少子化、働き方や家の変化…。

たとえ時代が変わろうとも、能や伝統行事が

暮らしの中に生き続けている黒川地域。その背景には、春日の神への変わらぬ敬虔な信仰心があります。

高校卒業後、帰郷しないつもりで上京した東京で、由部さんは能楽研究者の増田正造さんから能楽堂へ度々連れていかれるようになります。「そうしたらある日、着飾ったご婦人たちがロビーで黒川能のことを話していたんです。驚きました。それに千葉の親戚の家に遊びにいくと、部屋に必ず真壁仁先生の本『黒川能』農民の生活と芸術』が置いてあるんです。そうすれば読んでしまう。後で聞いたら増田先生も親戚も、父に頼まれて僕が戻るよう仕組んでいたんです(笑)」。

その後、地元に戻り、中学校の教壇に立ちながら能に携わる日々を送ります。そのうち東京公演や講演などの依頼が増え、黒川能や地域のことを自ら積極的に調べるようになった由部さんは、「地域も黒川能もすごいということがわかってきた。同時にどこの民俗芸能だって同じものを持つているだろうと、その道を活かす方法を探るようになりました」。

この春退職を迎える由部さんは現在、庄内各地の民俗芸能のネットワークをつくり、地域に活力を生み出そうという構想を立てています。「黒川能はそのために活用してもらえばいいわけです。民俗芸能に活力が生まれれば、黒川のように若者が地域に入ってくるはずですから」。

長い歴史の中で時代の難題に直面しながらも氏神信仰、伝統芸能、地域の「合力」を守り続けている小さな村。そして失ったと思われていたものが、今なお残る奇跡の村。その姿をみるために、今年も多くの人々が真冬の王祇祭を訪れます。



上座「春日龍神」(2012年水焰の能/鶴岡市櫛引総合運動公園野外ステージ)



上座「山姥」(2011年蠟燭能/春日神社)

黒川能の一年

黒川能は、王祇祭だけでなく、春日神社の祭事や蠟燭能など、一年を通してさまざまな舞台で演じられています。2013年の主なスケジュールを紹介します。

王祇祭のながれ

12月15日	霜月祭(六所神社)	興行
1月3日	宮上り(十七夜)	
1月17日	豆腐焼き	
1月中旬	掛餅つき	降神祭
1月29日	紫燈の儀(酒くらへ)	
1月30日	掛餅かけ	当屋使い
1月31日		
2月1日		
6時頃	《春日神社》王祇降り	
10時頃	《上座当屋》	《下座当屋》
18時頃	座狩り、当乞い	振舞
23時頃	振舞	座狩り、当乞い
2月2日	大地踏	大地踏
6時頃	式三番(所伝則)	式三番
	協能	協能
	※曉の使い(下座から上座へ)	
	中入り	中入り
	能四番	能四番
	狂言三番	狂言三番
	行列	《榎屋敷》
		大地踏

7時半頃	宮上り
10時半頃	朝尋常
13時頃	《春日神社拝殿内能舞台》
14時頃	協能(上座・下座)
16時頃	大地踏
16時半頃	式三番(所伝則)
2月3日	棚上り尋常
2月4日	餅切り尋常
	布剥ぎ尋常
	神事終了
	精進おろし
	山方礼
	道具渡し
	師匠礼
	衣装だたみ
	注連下ろし(榎屋敷)

奉仕能

春日神社に捧げる
神事能として、
主に拝殿内の
能舞台で演じられる

春日神社王祇祭(旧例大祭)

- ❖ 2月1日/黒川座中民家
- ❖ 午前6時〜王祇降り、午後6時〜演能
- ❖ 大地踏、式三番、能五番、狂言四番
- ❖ 2月2日/春日神社拝殿内能舞台
- ❖ 午前7時半頃〜宮上り(朝尋常)、9時〜演能
- ❖ 神事、能一番、大地踏、式三番
- ❖ 2月1日の観能は要申込み(後日抽選)

公演

黒川能イベント

蠟燭能

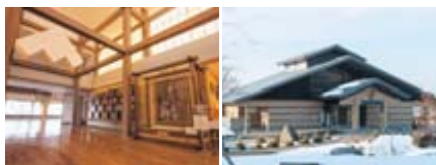
- ❖ 2月23日/春日神社拝殿内能舞台
- ❖ 正午12時〜開演(能一番、狂言一番)
- ❖ 20年前「黒川能は黒川で」を合言葉に始めた地元の手作りイベント。蠟燭の灯がゆらめく幻想的な空間で鑑賞できます。
- ❖ 必要申込。定員250名になり次第締め切り。
- ❖ S席7千円 A席6千円 B席5千円
- ❖ ※終了後の午後4時30分から王祇会館で能役者との交流会(会費3千円)が開かれます。要申込。
- ❖ 黒川能の里「王祇会館」☎0235(57)5310
- ❖ ※蠟燭能鑑賞・交流会を含んだ観光ツアーを、出羽庄内地域デザインで開催します。詳しくは本誌47ページをご覧ください。

水焰の能

- ❖ 7月27日/鶴岡市櫛引総合運動公園野外ステージ
- ❖ 17時30分〜開演(能一番、狂言一番)
- ❖ 櫛引庁舎商工観光班☎0235(57)2115

黒川能の里 王祇会館

王祇会館は、国指定重要無形民俗文化財「黒川能」を広く紹介する展示機能と、イベントや研修など地域住民の交流や生涯学習の機能を併せ持つ施設です。



鶴岡市黒川字宮の下253
☎0235(57)5310
☎午前9時〜午後4時30分
☎毎月第1水曜日・年末年始
☎大人400円、小中高生200円、高齢者・障害者300円(団体20人以上割引)

奉納

春日神社以外の
神社に奉納される能

羽黒山 花祭

- ❖ 7月15日/羽黒山出羽三山神社
- ❖ 午前10時〜演能(能一番、狂言一番)
- ❖ 稲の開花期にあたって五穀豊穡・除災招福を祈願する出羽三山神社の祭り。黒川能を奉納するようになった理由は、能を黒川に伝えた武藤家とのつながりという説があります。
- ❖ 申込・料金不要

荘内神社 例大祭

- ❖ 8月14日/荘内神社拝殿
- ❖ 午後5時〜演能(式三番、能一番、狂言一番)
- ❖ 多大な援助をいただいていた荘内藩主酒井家に対するお礼として、鶴ヶ岡城本丸址に創建された荘内神社で毎年奉納されています。
- ❖ 申込・料金不要

雨あがりの空の色、月の光の輝き
翡翠の色…。さまざまに例えられてきた
「青瓷」は、中国の歴代皇帝たちに
愛されてきた、誇り高き青の器

中村秀和さんの 青瓷

薄く細やかなカケラの重なりと静かにきらめく深い青。神秘的な景色をみせるこの器は、鶴岡市在住の陶芸家、中村秀和さんの「青瓷」だ。

起源が古代中国に遡るこの青いやきものは、素地に透明の釉薬をかけ、窯の中を酸欠状態にして焼くと、釉薬中の鉄分が青く発色するというものだ。だが天然原料の釉薬は鉄分の量が不安定だし、素地の土に含まれた鉄分の量や炎の具合によっても現れる色が異なるため、イメージ通りの青を出すのはたやすくはない。昔から青瓷が「手を出すと身をつぶす」と言われてきた所以だ。

中村さんの器は、なかでも貫入青瓷といわれる分野だ。貫入とは窯から器を出して冷ます時に生じるヒビのこと。そのヒビが、割れた薄い氷のように重なる様を「氷裂紋」という。これらは釉薬の扱い方である程度は計算できるものの、最終的には人の力が届かない「火の洗礼」を受けるため、作り手にとっては、その青のおおさと貫入の景色が個性の見せどころとなる。

ドロドロに調整した釉薬をたっぷりと。工房の湿度を整えながら素地にしみこむ限界を超えてなお釉薬を厚くかけ、窯の中へ。窯から出して冷め始めると、ピーン、ビシという音とともにヒビが入る。最初は大きく縦に横、斜め。ヒビは徐々に細くなって氷裂を浮き上がらせ、一週間ほどで落ち着くが、その後も数年かけて静かに増えていく。「求めるものが近いと思ったら遠くて遠いと思うたら近くて、いつまで経っても追いつけない」と語る中村さんの器は、作り手の探究心を象徴するかのよう、人々を青の奥へと引き込んでいく。



青瓷水指



青瓷長皿



青瓷香炉

「青瓷」は通常「青磁」と記しますが、中村さんは磁器ではなく陶器で作っているため、あえて「青瓷」と表記。他にも灰釉や茶金釉など異なる味わいの器もさまざまに手がけています。展示会などで購入できますが、実物をみたい場合は鶴岡市大山の工房へ直接連絡を。また鶴岡市本町1丁目の和食「西わき」では中村さんの器と日本料理のコラボが楽しめます。

お問い合わせ ☎0235-33-0886 (アトリエ)



青瓷輪紋大鉢 (直径52cm)

春光のひな街道を歩く

酷寒の庄内に住む者たちにとって、春を待ちわびる気持ちはどこよりも強い。地吹雪さえ当たり前の日々から、気がつくとも雪は木の芽起こしの雨に変わっていた。雪国でなければわからない、この時期の土の匂いがある。雪解けの土の匂いが、春の訪れを伝えてくれる。



色のない冬が終わりに近づくと、庄内にも春の光があふれ始める。春の訪れを喜ぶように、庄内の旧家には、華やかなお雛さまが並ぶ。

たらちねのつままずありや雛の鼻―蕪村

思わず微笑んでしまう句である。たらちねは、母に係る枕詞。高くなるようにと鼻をつまむ母の気持ちがよくわかる。この与謝蕪村自筆句稿貼交屏風が所蔵されている、酒田市の本間美術館を訪れた。まだ雪残る鶴舞園を歩くと、庭のどこからも望める池の水面に、樹影と春の青空

が映り、静かさを一層引き立てている。苔むした松の木や、屋根からの雪雫の滴る音が、大いなる静寂をつくる。遠く鳥海山の白い頂を借景に、庭園の一番美しく見えるポイントがある。きつとお雛さまもこの景を見て、和んでいるに違いない。本間美術館には、古いお雛さまが系統立てて展示されている。いつの時代のどの場所か、この雛たちは春を過ごしてきたのだろうか。どの雛もそれぞれの想いと歴史を黒い瞳に秘めて、今、私の目の前に並んでいる。

傘福の微笑むやうに揺れるたる―敦子

本間美術館にある風間家寄贈の段飾りには一対の傘福がある。この「傘福」は、江戸時代から酒田に伝わるつるし飾りのひとつで、子孫繁栄や子の幸せ、商売繁盛、無病息災などを願って、ひと針ひと針丁寧縫い上げられた手づくりである。

月山の光の中の享保雛―有馬朗人

城下町鶴岡、致道博物館のお雛さまは、兎にも角にも雅やかだ。ここで目をひくのは、大名家ならではの有職雛。そして、酒井家に嫁いだ田安徳川家の姫君の家紋のついた雛道具である。殊に小さな雛道具ひとつひとつに繊細な手工が施され、その場を離れられなくなるほど見惚れてしまう。後ろ髪を引かれて歩を進めると、古今雛のやさしい微笑みが迎えてくれた。

お雛さまは、見る角度によって表情が変わる。自分の一番好きな表情を見つけてるのも楽しい。またここには、色あざやかな鶴岡のお雛菓子が一堂に並ぶ。お膳に盛られた鯛や鱒の切り身や春の旬。京から伝わった伝統の技をもとに独自の文化がつくられた。鶴岡と酒田では、その文化も少し異なるので、雛菓子を訪ねて当地をめぐるのもまた面白い。

鶴岡の豪商旧風間家、丙申堂。建物の一番の特徴でもある石置の屋根には、まだ雪が残っていた。長い石置の廊下が続き、その脇の軒下からは、雪雫が冬の陽の名残を集めるように飛び立っていく。春の光と匂いを感じながら、いつの時代も変わらぬ想いを受けとめて歩くと、五人囃子や三人官女のささやき、お雛さまの笑い声が聞こえてくる気がする。



旧風間家住宅 丙申堂



酒井家の雛道具



本間美術館 鶴舞園

祖母の手を経てきし古今雛飾る―敦子

写真・文 俵谷敦子(月刊俳誌「月の匣」同人)

Cradle 旅行倶楽部



「有職雛」(江戸後期・京都製) 酒井家所蔵

庄内雛めぐり

お雛様に詳しい各施設の専門員がご案内
「百人一首かるた」「投扇興」体験
老舗「新茶屋」の雛段飾りと雛会席膳
日本三大つるし飾り「傘福づくり体験」
「割烹 鈴政」板長おまかせ寿司コース
2種類の自家源泉を持つ「龍の湯」に宿泊

3/2(土) 3/3(日)
■募集人数 限定20名様
(最少催行人員16名様)

■ツアー代金(お一人様) 34,800円
クレードルサポーター割引 32,800円
(現地バス代、宿泊代、入館料、食事代等込)
※庄内までの交通費は含まれておりません。
※現地より係員がご案内いたします。



山王くらぶの「傘福」

ご希望の方には「庄内雛めぐり」のチラシをご郵送させていただきます。

■お問い合わせは
通話料無料 0800-800-0806

庄内 クレードル 検索

<旅行企画・実施>
〒997-0028 山形県鶴岡市山王町8-15
株式会社 出羽庄内地域デザイン
山形県知事登録旅行業第 2-268 号
総合旅行業務取扱管理者 五十嵐敦